日本教育新聞　2017 年 12 月 4 日　朝刊 7 面
※無断複製転載禁止

東京学芸大学「国際算数・数学授業研究プロジェクト」

海外の教育関係者が研究協議会に参加

授業深める姿勢に感心

英訳の学習指導案を配布

タブレット端末などを使い、授業風景を記録に残そうとする海外の数学教育関係者ら

東京学芸大学「国際算数・数学授業研究プロジェクト」が主催する「2017年度授業研究イマージョンプログラム（秋）」が11月下旬に行われ、東京都荒川区立第三峡田小学校（白井一之校長、児童136）など2小学校の校内研究会に、オランダやシンガポールなど5カ国から数学教育関係者25人が集まった。日本特有の授業研究の実態を知り、より良い授業研究の在り方について考えることが狙いだという。

前時、三角形の角の和が180度になることを学習した第三峡田小学校の5年生たち。導入で既習事項を振り返った後、岩田哲教諭が学習課題を提示する。

「四角形の四つの角の和を求めましょう」―。教師の問い掛けや子どもたちの反応などを含め、通訳を通して英訳され、見学する外国の数学教育関係者たちにすぐに伝えられる。授業観察用のソフトが搭載されたタブレット端末を使いながらメモを取っていく。授業後の研究協議会に臨むためだ。指導講評は中村光一教授が担当した。

日本の授業研究は「諸外国から評価されている」と話すプロジェクトリーダーの藤井斉亮名誉教授。授業研究には、①研究テーマの決定②学習指導案の検討③研究授業④研究協議会⑤総括・振り返り―の五つの要素がある。「こうした日本の授業研究に対する価値は高く、それを国内の学校現場に知らせるには良い機会」と指摘する。

今回の視察の大きな目玉は研究協議会にも参加したこと。諸外国の教育関係者が見ることができる機会は少ないという。そのため、事前に英訳された学習指導案が配布された。

同校では「自ら学ぼう深く学ぼう」を研究テーマに、来年度から始まる新学習指導要領の移行措置に向けて算数から研究を進めている。キーワードは「主体的・対話的で深い学び」。研究協議会が始まる前に「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三つの視点について、本時の研究授業の「良かった点」や「改善点」などについて分科会に分かれて話し合った。

こうした教員の姿を見て、参観者から「何をしているんですか？」といった質問も。教職員集団で考えを練り上げることに対して「へえー」とうなずく姿が見られた他、日本の教員と意見交換も行った。

同プロジェクトは平成24年から実施し、今回で7回目。本年度はビル&メリンダゲイツ財団の支援によるMills大学Gates Lesson Study プロジェクトとの協働で実施した。今回の視察を受け、白井校長は「学校の取り組みをブラッシュアップする機会となり、教職員の励みにもなった」と話している。

プロジェクトに関する問い合わせ☎042・329・7447（成田）